

板橋宿



縁切榎／江戸時代から板橋宿の名所として名高く、悪縁は切ってくれるが良縁は結んでくれると、庶民の信仰を集めていた。



石神井川の桜



文殊院／1600年頃に創建された真言宗寺院
板橋宿本陣を務めた飯田家の菩提寺



現在の板橋

距日本橋から二里二十五町三十三間
日本橋から十軒六百四十二米

「板橋十景」にも選ばれるように、区内を代表する桜の名所となっています。

石神井川の桜並木

歴史の舞台となった「板橋」の下を流れる石神井川の両岸には、昭和9年以降、中板橋から加賀付近にかけて、約千本の桜の木が植えられています。花見の頃は、ソメイヨシノを中心にヤマザクラやオオシマザクラなどが咲き誇り、

現在、かつての宿場町は商店街に姿を変え、にぎわいを見せる中、周辺には多くの名所・史跡が残されており、歴史の面影にふれることができます。

昭和7年、「板橋」はコンクリート製の橋に架け替えられ、同年10月の板橋区誕生に花を添えました。

このように板橋宿は、江戸時代を通じて北陸・中山道方面の交通の要所、江戸の玄関口として、活況を呈していました。

「板橋」は、石神井川に架かる旧中山道の橋であり、江戸時代当時は、長さ9間(16.2メートル)、幅3間(5.4メートル)の大鼓橋でした。

この「板橋」を往来したのは、文政4年(1821年)の時点では、加賀藩前田家をはじめ、9か国41大名であり、幕末動乱期の文久元年(1861年)の皇女和宮の降嫁行列も最後に板橋宿に宿泊しています。

このように板橋宿は、江戸時代を通じて北陸・中山道方面の交通の要所、江戸の玄関口として、活況を呈していました。

板橋宿の面影

徳川幕府により中山道第一番目の宿場町として設置された板橋宿は、上宿・中宿(現在の仲宿・平尾宿の3つの宿場からなり、天保年間(1830～1844年)の時点では、本陣は中宿に1軒、脇本陣は各宿の名主が兼帯し、旅籠は54軒ありました。宿場名や区名の由来となったともいわれています。

中山道第一番目の宿場町として発展

日本橋から二里二十五町三十三間



「木曾街道板橋之駅」英泉画 現在のJR板橋駅付近



昭和初期の板橋

昭和



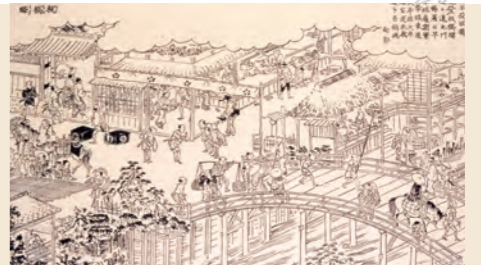
大正時代の板橋

大正



明治8年頃の板橋

明治



江戸時代の板橋

江戸